教育研究社会連携推進室 Letter　　令和５年９月 14 日発行

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 14

編集発行：武庫川女子大学　教育研究社会連携推進室

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携の活動が次第に数を増し、また継続的な活動も行われています。その中の際立った活動の概要を以下に紹介します。

【　日本語日本文学科　】

「日本語教授法」授業内で留学生と交流

７月 14 日「日本語教授法」の授業にて、神戸国際語言学院（西宮市）で日本語を学ぶ留学生を招いて交流した。９カ国 43 名（バングラデシュ 16 名、ネパール７名、ベトナム５名、中国４名、ミャンマー4 名、インドネシア２名、カンボジア２名、ウズベキスタン２名、韓国１名）が来学。

授業の前には、書道教室と和室を案内し、留学生はとても興味深く書道の作品や和室を鑑賞していた。

交流はグループに分かれて実施し、留学生各々の国の挨拶を教えてもらった。「このような機会がまたほしい」「すごく楽しかった」「いろいろな文化について学んだ」「覚えたての挨拶を話してみて、通じたことが嬉しかった」などの感想も見られて、とてもいい機会になった。

【　英語グロ−バル学科　】

国際協力・国際キャリア形成などについて、英語グローバル学科とボランティア団体の学生が、国際協力銀行大阪支店長と意見交換

国際ビジネス・国際協力ゼミ（細野教授）とボランティア団体「Mukogawa English Community」の学生が６月５日、国際協力銀行の鈴木大阪支店長と中央キャンパスで意見交換をした。

鈴木支店長からは、国際協力や国際ビジネスの動向について、アジアや中南米における事例等、様々な具体例を交えての解説、英語学修や海外駐在の体験から、国際キャリア形成に関する貴重な知見を聞くことができた。

学生たちは、国際協力、ビジネスコミュニケーション、国際キャリア形成などについて活発に質問し、理解を深めた。

【　教育学科　】

「赤ちゃん先生プロジェクト」を中央図書館で開催し、赤ちゃん、お母さんと交流

７月 12 日、教職課程「子ども理解と幼児教育」（塚田みちる教授、高井弘弥教授）の授業でこのプロジェクトを開催。中央図書館グローバル・スタジオでは、「赤ちゃんを知ろう」をテーマに学生たちが 10 組の赤ちゃん、お母さんと交流した。

このプロジェクトは、NPO 法人ママの働き方応援隊 Mamahata（ママハタ）のプログラムで、表情や行動から赤ちゃんの持つ力を体感し、お母さんの思いに触

れるというもの。受講者は、自身の成長過程を振り返り感謝の気持ちに気づくきっかけにもなる活動である。また、教職課程を受講する学生にとっては、これからの学びがより具体的に深められる機会となる。

プロジェクトでは、まず、学生たちが赤ちゃんに笑顔で話しかけたり、指遊びをしたりして触れ合うきっかけ作り、その後赤ちゃんも環境に慣れて走り出しりたして、赤ちゃんを中心にいくつものグループが動き回っていた。

また、お母さんから日常の様子やお母さん自身の気持ちを聞いたりして、母親目線の育児について理解を深めることができた。

プログラムの終わりには、「小さい頃を思い出して、お母さんは大変だっただろうなと改めて思いました」、「この経験を生かして幼稚園や保育所で先生になることを目指して頑張ろうと思いました」などの感想があった。

【　心理学科　】

兵庫県警西宮少年サポートセンターと甲子園署から本学心理学科の学生に対し、ボランティア委嘱式開催

不登校生徒の居場所作りに取り組む兵庫県警の西宮少年サポートセンターと甲子園警察署の呼び掛けを受け、心理コースの学生が不登校生徒のサポートボランティアに就任することになり、6 月 12 日、中央図書館グローバルスタジオで委嘱式が行われた。

委嘱式では甲子園警察署の担当者が「年齢の近い大学生と接することで不登校の生徒が学校に来るきっかけになり、大学生にも良い経験になってほしい」と期待を述べ、学生一人ひとりに委嘱状を手交。

学生たちは「積極的に参加し、子どもたちとコミュニケーションを取れるように頑張りたい」などと意気込みを見せた。不登校生徒のサポートを希望する中学校に学生が交代で出向き、登校してきた生徒と 2 時間程度、創作活動などを行って過ごす予定。

【　健康・スポーツ科学科　】

甲子園や鳴尾の魅力を、インスタグラム「甲子園スタイル」で発信

穐原准教授のゼミの学生が、甲子園や鳴尾地区のおすすめスポットやイベントなどを紹介しているインスタグラム「甲子園スタイル」の 2023 年度の運営開始。

西宮市、阪神電鉄、武庫川女子大学で運営している産官学連携事業で、学生がライターになり取材と執筆を担当し、SNS 等のコンテンツ制作と発信を行っている。本取り組みは 4 年目を迎え、取材地区や対象の規模が大きくなり、学生はゼミ活動の枠を超えて活発に活動中。

今年度の第一回目の投稿は、ららぽーと甲子園内にある LOFT の協力の下、同店のレイングッズを取り上げた。「武庫女生がおすすめする梅雨の時期に激推

しレイングッズ」として、傘、レインブーツ、合羽などを写真や動画で紹介し、今年のトレンドや機能を伝えて販売促進に貢献している。

【　生活環境学科　】

まちづくりコースの学生が芦屋市で、新市長参加も参加して、「七夕飾りワークショップ」を開催

7月2日、まちづくりコースの学生が芦屋市の「茶屋七夕フェスタ」で「七夕飾りワークショップ」を開催した。

「茶屋七夕フェスタ」は地域活性化を目指す「芦屋市茶屋さくら通り周辺官民連携プラットフォーム構築」の事業として、「茶屋さくら通り協議会」が主催、7月1日から7日まで実施するもの。

「フィールドデザイン演習Ⅲ」を履修している学生が授業の一環としてチームに分かれ、「七夕飾りワークショップ」「アンケート」「オリジナル絵本」の3種のプロジェクトに取り組んだ。

会場の「デコルテ studio」では、芦屋市の髙島市長も参加し、いっしょに七夕飾りを制作。作品は7日まで茶屋さくら通りの桜の木に展示されてる。

学生たちは、単発のイベントにとどまらず、まちづくりにつながる息の長い活動を目指しており、7月7日まで、芦屋市の茶屋さくら通り周辺を「七夕の回廊」で盛り上げた。

【　社会情報学科　】

大森ゼミの学生が産官学連携で広報に取り組む「デカンショ豆」の収穫に、附属保育園の園児が挑戦

附属保育園の園児が7月20日、「デカンショ豆」の収穫を附属保育園で体験した。

「デカンショ豆」は、丹波市内の若手農家5軒が栽培する品種で、「夏の枝豆」として新たな特産品化を目指している。2022年2月より大森ゼミの学生が丹波地方の食資源開発として食のリサーチを開始し、栽培農家から知名度の低さが課題と聞き、同豆の広報企画を提案したもの。収穫後の鮮度を保つのが難しい特性を考慮し、農家での収穫体験の販売・実施に取り組んでいる。

食育の観点から、附属幼稚園や保育園の園児や保護者にも収穫を体験してもらう本イベントを開催。

栽培農家の一つ「丹波たぶち農場」で当日の朝収穫したばかりのデカンショ豆が枝ごと保育園に持ち込まれ、学生が園児に摘み方を実演した。その後デカンショ豆を摘み取った園児からは「おうちでみんなと

食べたい」と歓声があった。収穫したデカンショ豆は、この日のおやつにし、残りは枝豆の折り紙を添えて、園児らが持ち帰った。

丹波篠山市ではデカンショ豆収穫を体験できるので一度お試しいただきたい。

【　食物栄養学科　】

学生の提案が 2 年連続で採用され、イトーヨーカドーとのコラボ弁当が関西 7 店舗で発売中

株式会社イトーヨーカ堂とのコラボ弁当「アジアを旅するデリランチ」が関西のイトーヨーカドー7 店舗で発売された。2022 年夏に学内で実施した「コラボお惣菜レシピコンテスト」でグランプリに輝いた 4 年生の上東さんの提案をもとに商品化したもの。

「コラボお惣菜レシピコンテスト」は、卒業生で旭松食品株式会社の田中さんの発案で、イトーヨーカ堂や株式会社日本アクセスの協力を得て昨年８月に実施した。旭松食品だけに、「高野豆腐や切り干し大根などの乾物」の使用条件がある。

弁当は 6 つの仕切りがあり、2 か所に米飯、4 か所に総菜が入る組合せ。今回は「アジアを旅する」をテーマに、ヤムウンセン（タイ）、ヤムニョム肉団子（韓国）、タンドリーチキン（インド）など 8 品目を入れた。高野豆腐は衣をつけて甘辛い味付けの酢豚風に、切り干し大根はもやしやニンジンとともにナムルに活用した。上東さんの提案は「アジア各国の代表的な料理をそろえ、旅行をしている気分になれる弁当を」というもの。コロナ禍で旅行が思うようにできない時期に、弁当で旅気分を味わってもらおうという企画が商品化につながった。カロリーは控えめながら、栄養バランスがよく、食べ応えがある。

イトーヨーカドー津久野店のリニューアルオープンに合わせ、4 月 25 日から発売開始。二年連続で提案が商品化された上東さんからは「コラボ弁当開発を通して企業の人と出会ったり、おいしいという声を頂いて、自分のやりたいことが明確になりました。挑戦してよかったです。」とのこと。

【　食創造科学科　】

学生が考案した淡路島の玉ねぎを使ったメニューがお店のコース料理の一部に採用

JA 全農兵庫の直営店である神戸プレジール本店で 6 月 13 日から 6 月 30 日まで本学科の学生が考案した 2 品がコース料理の前菜に採用された。

「食品産業論実習Ⅰ」で学生たちは JA 全農兵庫、あわじ島まるごと株式会社の協力の下、淡路島の玉ねぎを収穫した。JA 全農兵庫から「玉ねぎを使ったレシピを考案してほしい」と声が掛かり、学内投票で決定した 10 品の中から神戸プレジール本店のシェフが 2 品を選び、コース料理のメニューに合わせてアレンジ。「淡路島たまねぎ de パフェ」と「淡路島たまねぎと夏野菜のテリーヌ」がその 2 品である。

レシピ開発に携わった横川さんは「お店の雰囲気やメニューに合うような見た目や淡路島の玉ねぎの良さを存分に引き出すことを意識しました。この活動を通して、レシピ開発をする際にはお店の方やお客様のニーズに応えることが大切だと学びました」、山崎さんは「料理長がテリーヌのソースに牛のブイヨンを足したとおっしゃっており、ちょっとした工夫がお客様の満足度をアップさせると気付きました。今後はそういった工夫や配慮をしてレシピ開発に取り組みたいと思いました。」と話している。

松浦学科長からは「本学科は食品や栄養だけでなく、食品の安全性や営業、販売などのビジネスに関係した学びに特色があります。学生たちには積極的に様々なことに挑戦し、若いときから経験を積んでほしいです」と語っている。

【　建築学部、教育研究社会連携推進室　】

「トルコ南東部を震源とする地震の被災地調査報告会」が武庫川女子大学で開催

トルコ南東部を震源とする地震から半年になるのを前に８月５日、「トルコ南東部を震源とする地震の被災地調査報告会」が武庫川女子大学公江記念館大講義室で開かれ、建築関係者、研究者、行政の担当者、防災ボランティア、一般の人たち約 60 人がオンラインと対面で聴講した。

４月に本学建築学部と神戸市が合同で行った現地調査は兵庫県の「トルコ地震復旧・復興応援プロジェクト」支援事業に選定されている。帰国直後に甲子園会館でメディア向けに報告会を開いたが、今回はさらに詳しい調査結果とそこから導き出した提言を広く一般に報告することで、地域防災の教訓とするのが目的。

報告会では岡﨑建築学部長が長年にわたる本学とトルコとの交流について説明。2008 年にトルコ・バフチェシヒル大学と一般交流協定を結び、主に建築学部で留学生の交換があること、2011 年のトルコ・ヴァンで発生した地震でも神戸市と連携して被災地調査を行ったことなど、今回の調査に至る経緯を伝えた。

調査報告では柳沢建築学科長が４月 12 日から 20 日まで行った現地調査の概要を説明し、各地の被災状況を写真で紹介した。

続いて田川教授が、耐震構造の視点から「地震の強さと被害の状況」、同鳥巣教授が構造設計の視点から「建物の具体的形態と被害の状況」、神戸市建築住宅局の田中建築指導部長が「被災自治体首長訪問およびテントやコンテナ仮説住宅の視察」、柳沢学科長が「歴史的建造物の被害事例」について報告。

これら調査報告をもとにまず、鳥巣教授が提言を発表。①トルコの現行の耐震基準の妥当性を検証する、②天井や壁などが落下して人命に危害を及ぼさないよう、非構造部材の耐震性を確保する、③トルコでは鉄筋コンクリート造建物において、帳壁（荷重を負担しない壁）を無筋の組積造で作ることが多いため、帳壁を補強する、④非構造部材の軽量化、⑤隣接建物同士の間隔を確実に開けて地震時の互いの衝突を防ぐか、もしくは逆に一体化して耐震性を高める、⑥落下が目立ったモスクのミナレットの耐震補強法の開発、の６項目を呼びかけた。また、神戸市危機管理室の能勢正義計画担当課長は自治体の立場から、①日本やトルコ等の被災自治体の経験を共有する国際的な仕組みの構築。②震災に関する国民意識の醸成と向上、の二つの提言を発表した。

【　応用音楽学科　】

学生が 養父市の「YB ファブのナツフェス！」に参加

やぶ市民交流広場「YBfab」(養父市八鹿町) で 7 月 16 日、「YB ファブのナツフェス！」が開催され、本学科の学生が企画協力したイベントやその他のセションに、学生たちが参加した。

参加したのは「音楽活用実習」を履修している学生で、養父市のまちづくり文化交流課の担当者とともに、企画段階から携わった。

「プラコップランタン作り」では、地元の子どもたちと交流しながら制作を手伝い、「音楽療法体験プログラム＆コーラスワークショップ」では、専門を生かした楽器演奏や歌を披露。来場者も一緒に楽器を演奏したり歌ったりして、楽しいひと時となった。

ホールで行われるゲストのライブでは、音楽の持つ力を積極的に活用する「音楽活用専修」の学びを実践し、コンサートの運営面でも活躍。前期実習の集大成を成功裏に終えた。

【　薬学部　】

「第 7 回武庫川女子大学 M-COSMIC 市民講座」を開催

本学の武庫川化粧品イノベーションセンター (M-COSMIC) が主催する市民講座が 6 月 17 日にステーションキャンパスで行われた。

M-COSMIC は本学の薬学部を中心に 2022 年 4 月に設立。化粧品科学の研究推進と化粧品開発、地域や企業との連携、化粧に関する適正な知識の普及と啓発を目的に研究・活動をする研究所。化粧品研究のさらなる発展と一般の方々に正しい情報を周知させることを使命として活動しており、化粧品業界や一般向けに講座を実施。

市民講座は 2022 年 5 月から開催しており、今回の講座で第 7 回目を迎えた。今回のテーマは「自分に合った化粧品の選び方・使い方―スキンケアからメイクアップ化粧品まで―」。日本顔学会会長の菅沼薫客員教授が講師を務め、男性の参加も目立った。

菅沼教授は主にスキンケア化粧品、メイクアップ化粧品の選び方について説明。スキンケア化粧品を選ぶポイントとして、「自身の肌タイプを知る」、「過剰なスキンケアを避ける」「部位ごとに適した化粧品を使う」を挙げた。また、メイクアップ化粧品を選ぶポイントとして「部位ごとの肌の色に合わせた化粧品を使う」、「瞳と髪の色に合わせたアイブローを使用する」、「なりたい自分のイメージに合わせたメイクをする」について解説。受講者からの質問も相次ぎ、講座は盛り上がった。

菅沼教授は「化粧品はメイクをする人にとってのパートナーでもあるので、この講座で化粧品の正しい使い方・知識を知り、上手に使って楽しく素敵に暮らしてほしいです」と思いを語った。

【　経営学科　】

ららぽーと甲子園で『恋と花』がテーマの巨大ガチャイベントを開催

高橋ゼミの 学生チーム「Purple Asters」が 7 月 8、9 日、「ららぽーと甲子園」で高さ 2.4 メートルの巨大ガチャイベントを開催。これは、春日井製菓のロングラン商品「花のくちづけ」(キャンディ)の PR と SDG s 推進を目指す産学連携プロジェクトである。

「Purple Asters」は、全国大学ゼミ対抗の商品企画コンテスト「S カレ 2022」で優勝して今回の実現権を得たもの。

「花のくちづけ」は、花言葉が印字されているのが特徴なので、外袋に月ごとの花言葉をデザインし、12 種類作成。また、花店で廃棄される「ロスフラワ

ー」について考えるきっかけにしようと、ドライフラワーを使った手作りグッズを景品にした。

ガチャを回すと、中には直径 16 センチの大型のカプセルが一つ取り出せ、「花のくちづけ」とともに、ロスフラワーを使ったサシェや練り香水などのハンドメイド商品、恋のメッセージカード、ロスフラワー問題を説明するカード等が入れられている。

初日は、予定の 300 個が完売。二日目も開始早々からショッピングついでの親子やグループが巨大ガチャの前に進み大人気を博した。

「Purple Asters」のメンバーの塚本さんは「イベントを実現でき、子ども達の喜ぶ顔を見ることができてやってよかった。ゼミの 22 人全員でイベント運営に取り組み、ゼミとしてもビッグなイベントになりました」と語っていた。

【　学友会　】

国際ソロプチミスト西宮から「児童福祉研究部」に支援金贈呈

国際ソロプチミスト西宮の能登原会長らが 5 月 31 日、本学を訪れ、「児童福祉研究部」に対し支援金を授与した。

児童福祉研究部は児童養護施設の訪問や視覚障がい者外出ボランティアに取り組んでおり、2007 年に国際ソロプチミスト西宮がその活動を評価して「Σ（シグマ）ソサエティ」に認証。以来、毎年、活動支援金などの後援を受けている。

能登原会長は「若い人に奉仕の心を持ってほしいと思い、応援させてもらっています」と話し、吉田さんは「コロナ禍で活動が不十分でしたが、やっと活動が再開できました。昨年からデイサービスにも取り組んでおり、さらに活動の幅を広げたい」と語っていた。

【　図書館　】

中央図書館で上甲子園中学の生徒が企画展示を「トライやるウィーク」で完成

西宮市内の中学 2 年生が、地域の施設や事業所で職業体験をする「トライやるウィーク」。中央図書館で上甲子園中学の生徒 4 人が、図書館司書の仕事を体験した。

5 月 22 日、中央図書館に「出勤」した生徒たちは図書館内を見学した後、カウンターで大学生に本を貸し出したり、返却された本を書架に戻したりして図書館の仕事を体験。2 日目からは本や雑誌の受け入れや、装備・修理も行った。利用者の相談を受け付けるレファレンス・カウンターでは、新聞データベースを使って「上甲子園中学校」の記事を検索。

また、各自がテーマを決めて 3 日間かけて企画展示を準備。「色彩とデザイン」「夏バテしない食べ物」

「隣にいるいきもの」「天気と気象」について本を選定。最終日の 26 日に図書館スタッフに向けて、テーマを決めた理由や本の紹介を発表し、1 階に手書きのテーマプレートと本の展示を完成させた。

【　学院　】

学生が考案したスパイスカレーを子ども食堂のスタッフと一緒に調理

尼崎市の子ども食堂で活動する日文、教育、食栄の合同ゼミが 7 月 25 日に学校教育館で子ども食堂のスタッフとスパイスカレー作りに取り組んだ。

子どもたちに放課後の居場所と食事を提供する子ども食堂。本学では 2018 年から尼崎市元浜町の子ども食堂「モコモコ倶楽部」の運営をサポートしている。

今年度は、尼崎市に外国にルーツを持つ人が多く、またスパイスカレーの店が多いことに着目してオリジナルのスパイスカレー作りを企画。カレー店に取材を申し込み、作り方のポイントやスパイスなどについて取材した。

この日は学生が 3 グループに分かれて「ほうれん草カレー」、「ナスとトマトのキーマカレー」、「辛くない！リンゴ入りチキンカレー」の 3 種類のスパイスカレーを作り、試食後の投票で「ナスとトマトのキーマカレー」が 1 位になった。子ども食堂「モコモコ倶楽部」では学生たちのレシピを参考に子どもたちにカレーを提供する予定。また、学生たちは今後、取材したカレー店を紹介するマップ作りなどに取り組んでいく。

食栄の佐々木さんは「子どもたちには食文化の違いを感じながらカレーを味わってほしいです」と思いを語った。

子ども食堂「モコモコ倶楽部」代表の小林さんは「子どもたちはカレーが大好きで、学生が考えた鶏肉やほうれん草を使ったちょっと珍しいカレーを喜ぶと思います。コロナ後子ども食堂の利用は増えており、学生さんたちのサポートに感謝しています」と話していた。

日本盛株式会社と包括連携に関する協定書を締結

本学は日本盛株式会社（西宮市用海町）と 6 月 26 日、包括連携に関する協定書を締結。

本学はこれまで日本盛株式会社とさまざまな学術、人材育成、地域貢献などの連携事業を実施してきたが、包括連携の締結によって、両者の持つ社会的・文化的資源、人的資源の交流を一層活発化し、今、社会

で求められているSDGsの推進と地域社会の発展及び人材育成を促進していく。

協力事項は次のとおり。

（1）地場産業の活性化に関すること。

（2）産学連携活動参加による人材育成に関すること。

（3）学術・研究・教育に関すること。

（4）文化・芸術の振興に関すること。

（5）環境保全・維持に関すること。

（6）女性活躍推進に関すること。等

これまで、生活美学研究所スマートライフフォーラム「麗しの日本酒—儀礼と効用—」を甲子園会館で開催、日本盛株式会社から講座の提供、日本盛育英会奨学金制度等の事業が行われている。

「鳴尾ふれあいイベント 2023」が開催

「鳴尾ふれあいイベント 2023」が 5 月 27 日、阪神電車「鳴尾・武庫川女子大学前」駅の「武庫女ステーションキャンパス」や駅前広場などを会場に開催され、たくさんの人たちでにぎわった。

このイベントは、鳴尾地域の活性化に取り組む「鳴尾エリアマネジメント連絡会」（構成員：株式会社エンリッション、株式会社阪神ステーションネット、阪神電気鉄道株式会社、株式会社みなと銀行、学校法人武庫川学院、株式会社ライフイノベーション、株式会社ライフコーポレーション）が、武庫川女子大学の学生実行委員会とともに企画・運営する地域交流イベントである。

駅前広場のステージでは、本学書道部員が「縁」とメッセージを披露した。この後、本学のダンス部、エアロビックダンス部、吹奏楽部、附属高校のコーラス部、鳴尾地区に拠点を置く団体等が演技や演奏を披露し、大きな拍手が送られていた。

「みやっこセミナー」が本学で開催

西宮市と NPO 等公益活動市民団体啓発事業実行委員会が主催する「みやっこセミナー」が 8 月 27 日、武庫川女子大学中央キャンパスで開催された。

「みやっこセミナー」は、市民のみなさんの“学び”や“ヒラメキ”、そして“交流”が生まれる「学校」として、西宮市では初めての開催。

42 講座(一講座 50 分)が用意され、子どもから年配の方まで計約 500 人が受講し、楽しく学ぶことができる一日になった。

本学からは、小学生以上を対象とした教育学部神原ゼミのゼミ生による「Let’s play algo!!～算数ゲームで遊ぼう！～」と丹嶺学苑研修センターの加治さ

んによる「白血病サバイバーが伝授！『普通の毎日を最高に生きる方法』」が提供された。

　また、開会にあたっては、本学吹奏楽部がサックス五重奏による童謡「あんたがたどこさ」などを演奏。昼食時にも、唱歌、ジャズなどを披露した。

本稿の写真はすべて本学 HP からのものです。

ご意見・ご質問等は、本館５階　社会連携推進課まで
担当：安藤、大谷　(6212～3)
E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp